

洛友会会報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
友会

盛夏雑記

洛友会々長 松田長三郎

暑中御見舞

会員各位の御健康と御活躍を
お祈り申し上げます。

(1) 水 今、筆を執っているのは、梅雨どきであります。この会報が皆さんのお手許に届くのは、盛夏の候でありましょう。御自愛專一に祈り上げます。今年は例年に無く、少し冷やかであるし、雨が少ないようでもあります。西日本では集中豪雨の所もありますが、東京は雨が少なくて、水源池の貯水量は50%を割るとか云われて、今年の夏も給水制限が問題になっていくとかであるが、毎年このようなことでは不安、この上も無い。一千万人以上の都民に供給する水量は、一日六、五〇〇万立方メートルの由であるが、飲料水・工業用水・衛生用水など、その需要量は年々増大して行くことは明

らかであるから、帝都としての東京は、この不安解消の積極的施策が望まれるが、一方われわれ消費者側も、無駄使いを戒めたい。知らず識らずの間に、むだ使いをしていることが案外多いことか感ぜられる。京都は幸いにして、一大貯水池・琵琶湖のおかげで、安心して居られるし、嘗ては水饑饉に悩んだ四国の高松も、数年前、徳島県との話し合いで、吉野川から取水できるようにしてから、この心配は解消したと聞いた。

(2) 洛友会の目的 前号にも記載したことであるが、わが洛友会も六千を超える卒業生を持つ大世帯で、会員各位は全国に亘って、夫々の分野で活躍され、我が国が世界有数の経済大国に成長したのに対し、その一翼を荷われて来たことは、御同慶の至りであり、今後とも一層の御活躍を期待したい。洛友会は、その会則にも示されている通り「会員の親睦を図り、学術文化の発展に寄与することを目的とする」とありますが、本部としては、年一回の常任役員会及び総会、並びに会員名簿と会報の刊行が主な仕事で、この刊行には応用科学研究所の山本茂雄・吉田洪二両氏の労を煩わすことが多く、厚く御礼を申し上げます。また、各支部に大変お世話になっておりますので、この機会に併せて御厚礼申し上げます。又、各支部（関西支部会員一、九八六名、東京支部一、四五三名、その他七九二名）におかれては、夫々独自の活動を続けておられますが、支部総会にはお招きを受けて、教室の先生とともに出席させて頂いて、会員各位にて御活躍の有様を伺えることは大変嬉ばしいことであり、いろいろと御厄介をかけていることに對して厚く御礼を申し上げます。

(3) 大平総理の葬儀 内外多事多難の折柄、大平総理の急逝は誠に残念なことであったが、現在の総理大臣の権限職能は、行政の最高責任者として、戦前とは比較にならぬ位強大なものであるし、内政・外交も複雑多岐であるから、なかなか大変な大役である。ご同郷の関西電力会長の芦原義重さんは「一国の総理として逝去されたことは、男子の本懐であろう」と言われたが、正にその通りである。しかも、来る七月九日武道館で行われる内閣と自民党との葬儀には、国葬でないのにカーター米大統領、華国鋒中国首相を初め、各国から多数の参列が予定されている由、感謝の外は無いし、国としての重みを痛感する。米大統領が直接参列されることは、全く異例のことで、同盟国日本に対する親愛・信頼の顕われでもあり余程の厚意である。又、個人的には大平総理のあの素朴な林夫子然たる、飾り気の無い純情な人柄に共鳴された結果ではないだろうか。

ロンドン・タイムズ紙は、我が国を「指導者が急逝しても、クーデターも何も心配の無い安定した国」と評したことは、我々自身は気付かないことでも、外部から見るとそういう風に映るのであるうが、全国一民族・一国語の比較的稳定した我が国は、幸福な国ではある。しかし一方、自由と食糧や物資（何れも殆ど輸入）と、亭楽の氾濫している我が国の現状は、余り浮かれ過ぎると、こういう場合に以前はよく天譴必至と云われ

たものであるが、いかげんに引き締めないと、大きな禍いが来ないとも限らぬ。それについても思い起こすことは、天の饑饉は有名であるが、餓死者は道に溢れ、草根木皮、何物をも喰べつくし、さては近親者の肉までも喰つたと伝えられていることは、恐しいことである。

(4) 人の運 明治時代、青年学生理想は「末は博士か大臣か」と云われたものであるが、この種の栄達人生観から見れば、現在の大来外相などは、そういう人の一人であるかも知れぬ。同氏は東大・電気の出身であるが、昨年秋の衆議院総選挙に、ある小党から立候補されたが、惜しくも落ちられた。その時、運良く当選されていたなら、現在はいよいよ少数野党の一員であったであろうが、落ちられたばかりに、今や我が国外交の立役者として活躍せられ、先頃のベネチアの先進国サミット会議には、我が国の首席代表として、世界の外交の檜舞台に参加されるなど、今日の華々しい榮譽は得られなかつたであろう。何が幸いになるか、人生行路の運命は計り難い。異色の人、幸いに御活躍を祈る。

(5) 立志伝中の人 シャープの創立者早川徳次さんが亡くなられた。同氏は松下幸之助さんと同様

創業時代から随分苦勞を重ねられ、今日の大を為された立志伝中の人もある。人の成功には、運・鈍・根に恵まれるによるとよく云われるが、世俗的の成功にはこういう要素が必要であらうし、そういう過程に導く機運を招来するような、日常の修養・精進・努力・用意が大切である。裸一貫からスタートして、一代の成功を取めた人を、この外幾人か厚知の人があるが、何れの人にも、人には知られぬ優れた才能と魅力を持たれ、また幸運にも恵まれた努力の人達であると痛感する。

(6) マスコミの報道 筆者は大體朝が早い。七月一日、朝五時のNHKのラジオニュースを聞いたが、第一に聞えて来たのは、東京上野動物園のパンダ(カンカン)の死亡のニュースであった。国の内外の重要な事件は、その次に放送された。このことはそれ程重要なことであろうか。NHKはこんなことで良いのだろうかと嘆かしく思った。今はスポーツや歌謡曲花咲かりである。これらのニュースもこれはこれで結構なことではあるが、少なくともNHKや有力な全国紙などは、今少しこんな点に留意してほしいと思ったことである。

(7) 政治家の勇氣 今、世界の関心事は、イラン問題、アフガニ

スタン問題等々、国と国、民族と民族との対立・闘争の断えないこと、東西兩陣營の力のバランスの不均衡になって来たことである。先般のサミット会議でも、これが問題になったし、又去る一日・二日のシュミット西独首相とブレジ

ネフソ連書記長との会谈においても、シェ首相は会谈へき頭にソ連軍のアフガニスタンからの全面撤退を要求したと伝えられた。随分思いきったことを、卒直に話し合えることは、その結果はどうであれ、お互いに腹臍なく話し合えることは、緊張緩和(デタント)のため、大変結構なことであると同時に、シュミット首相の勇氣ある態度に敬服した。カーター大統領もこれに対し、感謝の意を表したと云われる。シェ首相は必ずしもカーター大統領の希望通りにはならない心の強さがある。

一昨年、同首相と東京でお目にかかったことがあるが、才気煥発、澆測たる政治家として、これからの世界を動かす人材の一人であらうとお見受けしたが、一九六〇年にお目にかかったアデナウアー首相は、人生を知り尽したようなおだやかな親しみ深い、人なつっこい哲学的な老翁といった感じを受けたことがあるが、兩者對比して興味を覚える。

(8) 日本の電話 今、我国でも

車内電話やカー電話が実行されて来ているが、一九三一年ドイツに行つた時、既にベルリン・ハンブルグ間の国際列車で行われていた。(当時一等乗客は筆者一人、老車掌さんはどこかえおかけになりませんかと勧めに来た)。又自動車、電話は、一九六二年米国のシカゴの世界で一、二を争う科学・工学博物館の館長さんの車に乗せてもらっていた時、お国に電話をおかけになりませんかと云われたことがあり、随分進んでいるなと感心したことである。しかし、今や我国も電話の普及は、米国に次いで世界第一という盛況である。輿近畿電氣通信局長によれば

現在三、七〇〇万台が加入し、五、〇〇〇万台の電話器が使われていると云う。老朽器の取替えや設備の近代化、改善等を進めるため、年間一兆七千億円の巨費が必要の由である。

米國なども電電公社の部品調達売り込みに厄起となつている状態であること、新聞紙上で報道されている通りである。今は通話は長距離電話は距離によって料金がちがうが、これは将来は均一になるであらうし、又国際通話にしても現在太平洋・大西洋・印度洋上三六、〇〇〇kmにある静止通信衛星によって、世界中どこでも一瞬にして情報が送受信できるようにな

っているし、その他軍事目的の人工衛星は、数多く空間を飛び廻つて、各国の軍事動靜や農作物の作柄の予測に至るまで、各種の方面や目的に活用されている。随分進歩したものと感心させられる。

近頃、なんでもないあたり前のことに感心させられることがある。たとえば、電話の送信機・受信機は音声の強弱の変化を電氣抵抗の変化に移し替えて電流を送りこれを再生して音声を聞くのであるが、あの強弱・音色など実に精巧無比の作用には驚かされる。半導体関係の急速な日々新たな革新的な進歩も驚きの外はない。

(9) 伊豆半島における六月下旬の地震は、震度5に及ぶものを含む群発地震で、同地方の人々は不安に襲われている。このために東海道新幹線初め交通機関も運転を休止するなど相当の混乱を來した。これだけ科学技術は進歩して来ているが、地殻の状態は今尚ハッキリしていないし、地震予知の知識も甚だ乏しい。万一地震発生の予告が出た時、或は突発した時如何に対処すべきかは重大な問題であるが、平常そういう心構えが甚だ乏しいように思う。大正十二年の関東大震災や昨年の宮城地方の地震などの教訓を心しておきたいものであるが、なかなかそうは行かないのが人間である。過日の

地震の際(午後4時20分)、東京の消防局のアンケート調査によると、三軒に一軒は火を使つていた。そのうち14%は火を消さなかつたというが、地震に際し、先づ火を消すことが第一であることを銘記したい。

(10) タイタニック号 遭難について想起することは、筆者の三高在学時代、当時の豪華客船タイタニック号(四六、〇〇〇トン)が乗客一、八〇〇人を載せて、晴れの処女航海に出たが、北大西洋で冰山と衝突して欲楽の絶頂から、一転して悲劇のドン底に沈んだことがあった。飛行機の墜落事故の場合は瞬間の出来事で、まづ全員死亡は免れまい。しかし、海難の場合は生死の境に直面する時間は相当長い。

当時伝えられたところによると船と運命を共にした乗客は、讚美歌を合唱しながら従容として、死に就いたとのことで、私共涙を流したことであった。こんな絶体絶命の境地に立った場合、果して自分はどうな態度がとれるであろうかを考える時、甚だ未熟な修養不足に自らを恥するばかりである。

このタイタニック号の探索が近く行われる由。波荒き北大西洋の深海五、〇〇〇mの海底を探るのであるが、引き揚げは考えず、只その金銀・寶石類を求めめる由。こ

の費用一千万ドルと云う。
(1) そこはかとなき雑記を書き記しましたが、この月はお盆の

月、今は幽明境を異にする故人を偲び、感恩とともに冥福を祈りた
い。(終)

藤田真一君を偲ぶ

昭和6年卒
応用科学研究所理事 吉田 洪 二

藤田真一君急逝の報を受け茫然
自失、全身の力が抜けて無暗と腹
が立った、そして涙が出て来た。

彼は入院の数日前、肺癌の手術
をする事になった経過について
私に電話して来た。何の屈託もな
く、いつもの元気で彼の言葉に
は何の不安もなかった。私もそう
信じて彼を励ました。にも拘らず
忽然として彼は逝った。思えば、
昭和三年京都大学に机を並べてよ
り半世期に渉る交りである。

卒業の後も恩師故鳥養先生を核
心として共に手を握り、励まし励
まされ、彼は会社にあつて私は学
校、研究所にあつて共に力を合せ
た。彼の熱情は誘導加熱一筋に突
き進んだ。周知のようにその成果
は立派なものとなつて結実した。

彼の会社に於ける貢献の偉大であ
つたことは論ずる迄もないが、我
国に於て高周波誘導加熱を創始し

赤穂工場は彼が脳疾患で倒れる
前に計画したもので、これが立派
に完成し、現在活動を続けている
有様を、さぞや行って見たかつた
に違いない。彼に一度関西に来る
ように勧めたが承諾を得られな
かつた。もう少しよくなつてから誘
い出そうと思つていたのでもう彼
はいない。彼のことを仕事の鬼だ
と誰もが云う。東京の自宅から、
或は会社から、よく電話をかけて
来た。次から次へと話がとび出し
て来て、切りに苦労する長い電話
であつた。こうしている今もまた
彼から電話が掛つて来るような気
がする。

た功績こそ大きく評価されるべき
である。応用科学研究所の今日あ
るのも彼に負うところ大である。
研究活動のかたわら焼入れ業務で
自活することを勧めてくれたのも
彼である。

文部省研究機関補助金を打ち切
られ消滅し去つた研究所の多い中
で、応用科学研究所が今日も活動
を続けているのも、彼のお蔭であ
る。会社の発展と共に新製品の開
発に彼の願ひは大きく拡がつて行
つた。また、彼は研究・教育の重
要性を唱えて止まなかつた。

春三月とは云え、ことしはいつ
までも寒く桜の蕾もほころびかけ
ていたと云うのに、藤田君、貴君
は何を急いで突然遠くへ逝つてし

藤田君の長逝をいたむ

昭和6年卒
関西電力副社長 伊藤 俊 夫

まつたのだろう。
同じ四国の出身で、高知高校と
京都大学とで机を並べあつた仲の
貴君に先立たれ、葬儀の際には友

人代表としてお別れの詞を述べる
事にならうとは思ひも掛けぬ事
した。

考えて見ると吾々が学窓を離れ
てから、歳月の流れは速いもので
もう五十年もたつてしまつた。そ
の間の歩みは国をあげて波瀾と苦
難に満ちみちたものでした。

昭和六年、共に大学を巣立つた
時にはすでに周囲の事態は徐々に
悪化の方向をたどつていました。
世界的な不況のどん底にあえぐ世
界の中で「大学は出たけれど」と
いう小説が出たりして、卒業式の
時就職がまがりなりにも決つてい
たのはほんの二・三人にすぎず、
一流の電気メーカーも五大電力も
中央官庁も門戸を閉じて、求職の
扉をたたくすべもない。そのため
電気とは縁の遠い、あるいはまる
で無縁のところでも何かと伝手を
たよつて、職を求めお互いちりぢ
りに別れて行つた淋しい社会への
首途でした。

死せる者死せりと思ふな
生きてゐる者あるうちは
死せる者生さん！
死せる者生さん！
ゴッホの言葉を借りていつまでも
彼は私の中に生きてゐる。

そんな時、ただ一人、藤田君、
貴君は立派でした。
京都大学で鳥養先生の御指導の
下に新しい技術を研究し、これに
成果を挙げるやその企業化に取組
み、同じ学舎の友を呼びよせて営

々として事業の基盤を築き上げま
した。
そうして、戦後は荒廃の中から
再起をはかり、着々と事業の幅を
広げて見事今日の大成をもたらし
ました。これは偏に貴君の緻密
な企画力と熱意と行動力がしから
しむるところと深く敬意を払う次
第です。

藤田君、貴君は生来スポーツマ
ンで頑健な身体に恵まれ、童顔で
人なつこく快活で、しかも大変
人の面倒見が良く、友達思いでし
た。

吾々友人一同貴君の暖い友情を
決して忘れることはありません。
また、貴君のこうした親しみやす
くしかも信頼感に充ちた人柄が、
貴君の会社の発展を今日に到らし
める影の強大な推進力になつてい
たのだと思ひます。

だが、その間ずいぶん人知れぬ苦
労もあつたらうに、貴君はいつも
ケロリとした顔を吾々に見せてい
ました。

貴君は途中不幸にして病におか
され、奥さんの愛情こまやかな片
腕に支えられて次第に健康を取り
もどしていったのだが、貴君が不
自由な手でタイプしてくる手紙
には、病には負けぬぞという不倒
不屈の気力が不揃いな印字の一字
一句にほとばしつており、涙ぐま
しいばかりに胸を打つた。

「頭張ってほしい、もとのほつらつたる藤田君に戻ってほしい。」
吾々クラスメートの気持ちは皆んな同じだったと思う。

昨年の五月、高校のクラス会で貴君が久し振りに吾々の前に元氣な姿を現わしてくれた時は本当にうれしかった。

貴君は立派に立直ってくれたのだ。そう思ってから一年たらず、ついこのあいだ今年のクラス会のことでも電話をした時も貴君は元氣な声で相談のつながりの最後になろうとはなんと云うはかない事でしょう。

かつて伊豆の療養所に貴君をたずねた時、貴君は「この種の病氣で倒れる筈ではなかった」と云ったように思います。だが、最後は貴君がはじめからひそかに恐れていた病が貴君を奪い去って行ったようです。

悔んでも悔んでも悔み足りないことです。かけがえのない貴重な人、これだけ精魂を尽して努力した人を失ったことはなんととしても残念の極みです。

せめてあと五年でも十年でもよい第一線を離れて、奥さんと一緒に心静かな余生をすぎさせてあげたかった。それだけが心残りです。

貴君もそんな気がして医師がメ

上之園教授学術会議会員選挙に立候補

今秋に行われます第十二期日本学術会議会員選挙に、上之園親佐教授が京都大学工学部、電気学会、電子通信学、テレビジョン学会、電気照明学会から推薦され、全国区（第五部、電気工学）で立候補されることとなった。

スを入れるのを許したのではなかったのだろうか、とも思います。今となればただ心から貴君の冥福を祈るのみです。

今貴君の最近の写真を手にとってみると、吉田山のふもと、古い校舎裏のテニスコートで球を追っていた若い頃の貴君の姿が眼前に

浮かび上がってきます。「おれはやるだけやっただぜ」とほこらかに私どもに語りかけているようにも思います。

話したいことは沢山ありますが永年貴君から頂いた友情に心からお礼を申し上げお別れとします。

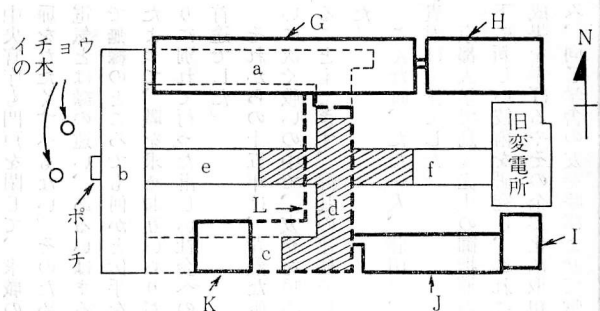
電気電子工学科の新築工事始まる

電気工学第2学科教授 近藤 文治

老朽化が目立ち改築が望まれていた電気工学科及び電子工学科の建設工事がいよいよ始まり、六月下旬から古い赤レンガ建物の一部の取壊しが始まりました。この洛友会報が皆様のお手許に届く頃には、取り壊しは完了し、地下に埋もれた遺跡の調査が行われています。

改築計画の詳細については、既に昭和五十三年十月一日号の洛友会報に詳しく報告致しましたが、簡単に要点だけを再録します。図

に電気系教室の現況と改築計画が示してあります。図に太い点線で示した建物しが今度新築されるもので、地上四階（一部地下室あり）コンクリート造りであります。太い実線で示した建物（G・H・I・J・K）は、現有のコンクリート造りで将来もそのまま使用される建物であります。これらの建物は、Iを除き新築建物と相互に連絡されることとなります。これからの予定は、まず今年中に埋蔵文化財の調査を終り、もし考古



- G : 電気工学第2学科 (S. 38, 39)
- H : 電気総合館 (S. 38, 関電寄付)
- I : 大電カイオン源実験室 (S. 50)
- J : 電気工学科分館 (S. 9)
- K : イオン工学実験施設 (近く完成)
- L : 電気・電子工学科 (新営予定)
- a と b d の北半分の1階部分 (M. 33)
- c と b d の南半分の1階部分 (M. 35)
- b, c の2階部分とe及びポーチ (T. 10)

学的に格別の価値のあるものが出士しなければ、来年度の予算で新築されます。従って完成は昭和五十七年三月頃となると思います。

図中の細い実線及び点線で示された建物は、明治時代から大正時代にかけて建てられたもので、実線は現存のもの、点線は既に取り壊されたもの、ハッチング部分は今回取り壊された部分であります。なお、e棟及びf棟の残存部分は、新築完成後取り壊されることになっていきます。そうなる

と、赤レンガ建物としては西側の一棟だけが残ることになります。この部分は外観はそのまま保存し、内部だけを完全に改造する

ことに決定しています。着工時期は未定ですがI棟が完成後のできるだけ早い時期を希望しています。

以上が改築計画の全貌ですが、b棟を右に述べたように改築するようになった経過について説明しておきましょう。それには、教室の建物の歴史に触れることが必要です。

話は京都帝国大学が創設された明治三十年に遡ります。理工科大学（理工学部）は土木工学科及び機械工学科の二学科で、大学創設と同時に発足し、直ちに校舎の新営に取り掛りましたが、土木・機械両学科の建物は、建築期間の短

縮と日清戦後後の経済状況が良くないことから木造となり、両学科が共用しました。古い機械工学科の建物がそれでありませんが、いまはもう見ることはできません。引続いて建てられたのが電気工学科の赤レンガ造りですが、始めは平屋建てで、明治三十三年から三十五年にわたって建ちました。図中のa b c d棟がそれでありました。その後大正十年になってb c棟の2階分が増築されると共に、e棟(中央実験室)及び支関ボーチが新築されました。卒業生の多くの方々に取って懐かしい思い出となっている支関、イチェウの木、赤レンガの建物などの風情はこの時で上がったのです。

以上のことから明らかのように電気工学科の建物は、大学創設後の最初の赤レンガ造りで、建学当時の面影を留めた由緒ある建物であります。こうした古い建物がほとんど失われていくキャンパスの現状から、最近学内でも歴史的建造物を保存すべしとの声が高まってきています。また教室としても古い建物を保存し、先覚者・先輩を偲ぶよすがとすることは、教育の見地からも有意義と考え、前に述べたような改築を行う決意した次第です。

ところが保存改築は、大学としては始めての試みであり、工事法の検討、予算の問題などいろいろの問題があり、関係方面の深い理解と強力な援助があつて始めて実現することができるとは、われわれとしては、その実現に向けて最大の努力を払う積りです。何卒ご支援の程よろしくお願い致します。

なお、b棟の外観保存に関連して、近く完成するイオン工学実験施設の建物Kは、この建物が電気ブロックの中に組み込まれるものであり、b棟の赤レンガ造りと調和するよう、外装は赤レンガタイル張りとし、デザインも工学部

日本学術会議第五部より

—日本工学技術機構(仮称)の設立について—

昭和15年卒 東北大学名誉教授 二村 忠 元

本文に入る前に

さる六月七日の洛友会東北支部総会には、本部より会長松田長三郎先生並に池上文夫教授の御参会をいただき、同支部長として支部会員一同を代表して厚く御礼申し上げます。

池上教授には例年のように母校の近況を伺い、また移動通信に関する興味ある講演を頂き深く感謝いたします。

松田先生には列車にて着仙早々

の標準建物と変えてあります。七月二十五日竣工の予定で、目下最後の仕上げを急いでいます。また新築予定のL棟についても同様になります。こうすることによって、単に建物だけを残すのではなく、建学当時の雰囲気を残すでも残したいと念願しています。

工事中は何かとご迷惑をお掛けすること存じますが、何卒ご了承の程お願い申し上げます。次回教室へお越しの節は電気系教室の姿も非常に変わっていることでしょう。

会場にお越しいただき、休む間もなく種々有益なお話を頂戴し、翌日曜日には故平井寛一郎先輩(前東北支部長・元東北電力会長)の御遺族を訪問(三国氏・二村同行)、同日午後には蔵王のエコーラインを観光(山下氏・三国氏同行)と、先生の御元氣な姿に一同感嘆申し上げた次第です。更に加えて、同日は秋生温泉に一泊して頂き、翌月曜日には東北大学電気系(電気・通信・電子各学科及情

報工学教室)を訪問(二村・伊藤案内)され、同窓の伊藤貴康教授の研究室その他二三を見ていただき、数人の教授連と昼の会食をとり、午後には電気通信研究所を訪ね、岩崎教授の垂直録音方式、津屋教授の磁性材料・太陽電池などの融体超急冷法による製造装置などを見学して頂き、夕刻の便で離仙されました。工学部の旧二村研(小生本年停年退官)で、「松田先生は小生の学生時代の卒業研究の指導教授です」と紹介した所、そこにいた助教教授・助手・学生などより、「先生と余り変わりませぬね」と小生が冷やかされてしまう程……。松田先生遠路の御来仙本当に有り難う存じました。益々の御健勝を祈り上げます。

本 文

余り紙面がないで、結論的な表現になることを御許しただきたい。面積はわずかに世界の〇、三%に過ぎず、資源、エネルギー源の大半を国外に依存している我が国の経済活動の規模は、現在世界の約一〇%を占めている。これを維持するためにも、また我が国に全世界より寄せられている国際社会上の責任と役割を思うとき、我が国の科学技術特に工学技術の果たすべき役割と責任は非常に大きい。一口に云って、「日本の立ち行く道は科学技術特に工学技術立

国以外にはあり得ない」ということだろうか。またこんなことも云える。「工学技術を土台とした発展は、いったん軌道に乗ると、日本の場合のように軍時的大敗北すら乗り切ることが出来、このことは工学技術に基づく発展の力強さと持続性を示すものである」と。又「工学技術は現在を支配している以上に、未来を支配するであろう」と。

さて、このような観点から、日本の科学技術者の国会と云われる学術会議を振り返ってみよう。会員総数二一〇名(各部三〇人、七部よりなる)は学九〇%以上、官数%、民二〇%といった編成で、これではアカデミックなことの方に走り易いのは当然である。特に第五部(工学)の担当する範囲は、その有権者が、八万人にも及ぶことから明らかになりに極めて広いものがあり、わずかに三〇名の第五部会員をもってしては、現在のルーチンワーク的な処理が一杯であつて、工学技術に関する各種重要事項について諮問に応じたり、技術政策を立案するなどは、実質的には到底不可能な状態にある。従つてこのことを可能ならしめるために、会員二〇〇〇〜三〇〇〇人位(民五〇%、学三〇%、官一五他五程度)の、また現在の一〇倍増の予算(現在の学術会議の総予

算(約七億円)を持つ日本工芸技術機構の設立を企図し、次に示すような政府に対する報告案を、先日の第五部会で承認した。小生もその一人であるこのためのワーキンググループの数ヶ月に及ぶ努力の結果からの提案の本文のみである。長文の説明も提出されたがここには示されていない。そして出来れば学術会議の秋の総会に提出して、他の各部の承認をとりつけ、日本学術会議としての総理宛の報告にもって行きたいということになった。具体的な組織例えば純官的なものにするか、半官半民の特設法人にするか、会員数は、事務組織は、予算は、会員選出法は、といったことはむしろ将来問題に残し(但し一応の複案はW、G、で早急につめることとし)、先ず基礎理念としての提案が本文なのである。

「日本工芸技術機構(仮称)の設立について(勧告)」(案)

昭和五五年六月二〇日

資源、エネルギー源に乏しい我が国において、将来の健全な国民生活を確保するためには、工芸技術のより一層の振興が重要であることはいうまでもない。しかし、現在の我が国の工芸技術は重大な転換期を迎え、国内的にも国際的にも幾つかの大きな問題をかかえている。

我が国の工芸技術は明治以来、欧米先進国からの導入により発展してきた。特に工業生産技術は顕著な進歩を遂げ、現在の我が国工業力の強化に役立っている。しかし、基本的にはいまだに欧米追随型から脱却できず、真に我が国独自の自主的な工芸技術は極めて少ない現状にある。我が国が世界の文化に貢献し、国際社会においてその責任を果たすためにも、また将来の我が自身の発展のためにも、この自主的工芸技術開発のための基盤づくりは極めて急を要することである。

多様化する現在の社会において、工芸技術は著しく発展し、その経済社会に占める位置は大きくかつ複雑である。したがって工芸技術政策の賢明な選択が、将来の我が国の発展のために極めて重要である。また自主的工芸技術の開発も含めて、工芸技術の正しい発展のためには、基礎研究と、応用開発とのより緊密な連係を図ることが強く要望されている。

以上のような我が国の工芸技術の現在及び将来の諸問題を追究し、工芸技術をして、将来の健全な国民生活に寄与させるためには、ともすれば縦割的になりがちな我が国の体制の不備を補い、大学、官公庁、民間の各分野の工芸技術者がそれぞれの立場を超え、長期

的、国民的視野で工芸技術の諸問題を討議する場を設けることが極めて重要である。このようにして初めて、国民の同意の得られる工芸技術政策が生まれ、国民の工芸技術に対する正しい評価が得られるであろう。またこうした背景の下に、独自の工芸技術の開発及びこの分野の優れた人材の育成も期待されよう。

本会議は上記のような認識に立って、その対策を検討し、審議を続けてきた。その結果、下記に示す任務をもつ「日本工芸技術機構(仮称)」を設立することが、現下の急務であるとの結論に達し、その設立をここに勧告する。

記

一、設立

大学、官公庁、民間における工芸技術諸分野の指導的立場にある人々が参加し、我が国の工芸技術の現在及び将来の在り方について討議を行い、それぞれの立場及びそれぞれの分野の間の連係を図る常置的な場として日本工芸技術機構(仮称)を設立する。

二、任務

日本工芸技術機構(仮称)は、次の諸事項に関し調査及び審議を行い、必要に応じて政府、地方公共団体、民間の関係機関の諮問に応じ、あるいは工芸技術

- の立場から自発的な提言、助言等を行う。
- (1) 我が国の工芸技術に関する基本的施策の策定に関すること。
 - (2) 我が国の工芸技術の重要開発課題の選定、及びその具体的実施計画の作成並びに追跡評価に関すること。
 - (3) 先見性のある工芸技術の創造のための環境の整備に関すること。
 - (4) 教育機関並びに実社会における優れた工芸技術者の育成に関すること。
 - (5) 国内外における工芸技術情報の収集、及びその活用のための体制の整備に関すること。
 - (6) 工芸技術の国際交流に関すること。
- また、上記諸事項を工芸技術の特定諸分野、特定諸問題に関すること。

して審議するために、必要に応じて部会等を置く。

この提案は、第五部として今期当初即ち二年程前より考えていたことであるが、昨年以来の江崎レオナ氏による強い要請に慮るためにより促進されたことも事実である。但し江崎氏の提案の「日本工芸学士院」の名称はとらず「日本工芸学アカデミー」か上記名称かということで、結局上記の名称を採用することとなった。洛友会の皆様からも有益な御助言御批判、そして御後援を戴ければ幸である。

最後に、母校より上之園教授が来期の学術会議に立候補されるとのこと、いわゆる強電関係の会員が少ない折でもあり、是非成功されることを祈っております。(東北学院大学教授、前東北大学電気通信研究所長、日本学術会議第五部会員)(昭和五五、七、六)

研究室紹介

**原子エネルギー研究所
原子炉計測工学研究部門**

原子エネルギー研究所は、昭和46年4月に、工学研究所の名称変更によって誕生した研究所で、工学研究所あるいはその前身である中央実験所時代から、電気系教室と深い関わりをもつ研究所である。以前は電気工学教室の南側にあったが、昭和42年に京都大学宇治キャンパスに新築移転し、研究設備なども整備してきた。現在9

研究部門からなっており、そのうち2研究部門は電気系専攻に属して、大学院教育を担当している。

原子炉計測工業研究部門は、昭和33年に工学研究所に新設された研究部門で、発足の当初は林重憲教授が併任教授として部門を担当され、若林二郎が講師として電気工学教室から移籍し、桜井彰（現原子エネルギー研究所教授）が助手として東北大大学院学部から着任して、新部門の研究活動を開始した。其後昭和40年12月より若林が部門を担当している。

現在の部門構成員は、星野力助教授（昭和40年博士課程修了）、大西正視助手（昭和49年修士課程修了）、田嶋真一助手（昭和53年修士課程修了）および佐藤隆技官、藤田静香事務官の計6名である。

また研究室で勉強研究している学生は修士課程5名で、このほかに毎年数名の学部学生が特別研究を行っている。

講義としては、若林が学部の原子力工学を担当し、発電工学を分担している。また大学院の原子力工学特論は若林と星野が担当している。

本研究部門の名称は原子炉計測工学となっているが、研究の内容は原子エネルギーの開発を目標とした、システム工学的研究で、研究の手法は、一部で模擬実験も行

っているが、大勢は計算機シミュレーションである。したがって研究設備としては、原子炉炉心冷却系の模擬実験装置とハイブリッド原子炉計算システムを備えているが、むしろ後者の増強に力を入れてきた。現在ハイブリッド原子炉計算システムの構成は、中型計算機FACOM M-150Eをマスター計算機として、これにミニコンPANAFACOM U-200を介して、デジタル・ダイナミック・シミュレータDS-1000、2台のアナログ計算機ALS-1010、SLS-25および模擬実験装置の計測系を直結しており、また研究室で偏微分方程式の計算に対する専用計算機として開発試作した、32台のマイコンからなる並列計算機PACS-32がマスター計算機に直結されている。これらの研究設備を用いて、現在次の研究を行っている。

1、原子炉の異常診断に関する研究

異常診断の研究は、原子力プラントに異常が発生したときに、これを速やかに検出するとともに、異常の原因を推定したり、異常が今後どのように進展するかを予測して、これに対して取るべき処置を適確に与えることによつて、原子炉の事故を未然に防いだり、事故の規模を軽減することを目的としたものである。

(a) 炉心冷却チャンネル内で発生した局所異常の検出法の研究、冷却チャンネル内の局所異常による局所沸騰の開始を、チャンネル出口で観測した温度および圧力信号に含まれる雑音成分を解析して検出しようとするもので、現在研究の最終段階に達している。なおこの研究は高速炉の炉心を対象として進めている。

(b) 運転中に発生した比較的小さな異常の診断システムの研究、原子力プラントで観測されている多数のプロセス信号を総合的に処理して、現在の運転状態が正常およびあらかじめ決めたいくつかの異常カテゴリーのどれに属するかを、速やかに判別するとともに、この判別結果を参考にしてさらに解析を行い、異常の原因を推定する手法の研究で、パターン認識、システムモデルの同定、システムの状態推定などの手法を用いて、計算機実験を行っている。現在ある程度の成果を挙げ、実用化への見通しも得られたが、なお細部に ついて、多くの問題を含んでいる。

(c) 事故停止後の原子炉の内部状態推定、事故停止した原子炉の

内部状態を推定し、事故を最小の被害で速やかに終結させるために取るべき処置を見出すことを目的としたもので、昨年のTMI事故以後その重要性が認識されるようになった。従来の安全解析や、安全審査のための計算コード程高い計算精度は要求されないが、適切な精度で短時間に計算できることが必要である。一部に実測可能なデータを導入しながら、妥当な精度で短時間に計算する手法を研究している。

2、原子力発電所の最適運転計画の研究

原子力発電所には、安全上および運用上多くの制約条件が課せられている。これらの制約条件を満たしながら、電力系統の中におかれた複数基の原子力発電所の最適な運転計画と燃料交換計画を、電力系統の経済運用の立場から求めることを目的としたもので、典型的な大規模数理計画問題である。手法としては、原子炉部分には非線型計画法を含むFAPMANモデルを用い、系統の経済運用部分には確率的シミュレーションを用いたORSIMモデルを用い、両者の協調を分解原理によるアプローチで解決することを予定している。

3、核融合プラズマにおけるアルファ粒子に関する研究

近年、核融合研究は着実に進展し、臨界プラズマ条件を達成すべく、日、米、E.Cで大型トカマク装置が建設中であるが、今後の大きな研究課題の一つにD-T反応の結果、発生するアルファ粒子の炉心内での挙動に関する問題がある。アルファ粒子加熱に伴う炉の熱的不安定、アルファ粒子の閉じ込め、その損失による電場の発生および第一壁の損傷、プリスタリングおよびスバタリングによる不純物イオンの発生、高エネルギーのアルファ粒子がプラズマを不安定にする核熱不安定性、熱化アルファ粒子の排気等の問題はプラズマ物理のみならず炉工学とも密接に関連しており、核融合炉の実現のため早急に解明されなければならない問題である。現在理論的ならびに計算機シミュレーションによりこれらの課題と、取り組んでいる。

4、偏微分方程式に対する専用並列計算機の開発研究

原子炉内の中性子束分布や熱流動現象の解析、核融合炉プラズマの解析など、本研究室では、偏微分方程式で記述される連統体・場の数値シミュレーションを行う強いニーズが存在する。しかし汎用の逐次型計算機はこの種の計算にとって最適からほど遠いもので、むしろ並列演算によつてその計算

は、

速度は著しく改善され、従来不可能な計算も可能になると考えられる。最近のLSIの進歩によって、マイクロプロセッサを多数並列に結合したアレイ型計算機が実現可能となったので、まず32台のマイクロプロセッサからなる並列計算機を開発試作し、現在さらにその設計の改良を進めている。なおこれは前述の1(c)、2

昭和五十五年度洛友会総会

昭和五十五年度洛友会総会は、去る五月三十一日(土)京都において行われた。例年とは異り、同日午後まず京都大学ヘリオトロン核融合研究センター及び母校電気工学教室の見学を行った。その後京都駅前の新ミヤコホテルにて、関西支部総会に引続いて洛友会総会が開かれた。参加者は約七十名であった。

ヘリオトロン核融合研究センターは、京都大学附置研究センターで、宇治キャンパスにある。同センターはヘリオトロン装置と呼ばれる核融合装置を研究するもので、同装置の開発は、故林重憲教授の指導の下に、現センター長宇尾教授ら洛友会員の手によって開始され、わが国独自の考案になるものである。今度新設された装置はヘリオトロンEと呼ばれ、文部

および3の研究に利用する予定である。

以上のように、本研究室では電気工学の立場から、原子エネルギーの開発という巨大科学技術の発展に寄与すべく努力している。何卒洛友会会員各位の一層の御支援と御鞭撻をお願い申し上げます。

(若林二郎記)

省支出の七十数億円という巨費を投じ、三年の歳月をかけて最近建設を終った巨大な装置である。当日は雨の中ではあったが、エネルギー問題の喧しい今日、未来の夢のエネルギー発生装置として注目されている核融合装置に直接触れることができ、見学者に深い感銘と感動を与えた。

その後バスで吉田キャンパスの電気教室に向った。電気教室は別掲記事の通り、西側の一棟を除き、残りの赤レンガ建物をすべて取壊し、同じ場所に新しい建物を建てる工事が進行中で、取壊し寸前の最後の教室の姿を見て頂くとの企画であった。見学者は、それぞれ思い、出の糸をたぐり乍ら、雨の中暫しの思い出に浸った次第である。

洛友会総会は、近藤幹事の司会

昭和54年度収支決算

昭和54年4月1日から昭和55年3月31日まで

収入の部		(単位 円)	
科目	目	決算額	予算額
会費		6,094,800	5,580,000
	〃 (講習所)	605,900	600,000
預金	利子	219,638	250,000
広告	掲載料	2,011,000	1,800,000
雑収	入計	79,550	80,000
収入	計	9,010,888	8,310,000
前年度	繰越金	5,090,479	5,090,479
合計		14,101,367	13,400,479

支出の部		(単位 円)	
科目	目	決算額	予算額
名簿	編集費	45,300	30,000
	〃 印刷費	4,147,000	4,200,000
	〃 送費	695,640	800,000
会報	編集費	3,300	10,000
	〃 印刷費	628,100	600,000
	〃 送費	983,885	900,000
備品	費	244,630	20,000
通信	費	97,940	80,000
会合	費	122,132	150,000
総会	費	300,000	300,000
集金	費	131,170	120,000
総掛	費	426,710	400,000
旅費	費	619,560	550,000
懇話会	補助	150,000	150,000
支出	計	8,595,367	8,310,000
次年度	繰越金	5,506,000	5,090,479
合計		14,101,367	13,400,479

預金および現金 (昭和55年3月31日現在)

信託	預金	1,000,000
定期	預金	2,299,360
当座	預金	241
普通	預金	2,133,666
郵便	預金	291
現金		72,442
合計		5,506,000

以上の経理を監査した結果誤りのないことを確認致しました。 幹事 近藤文治

昭和55年度収支予算

昭和55年4月1日から昭和56年3月31日まで

収入の部		(単位 円)	
科目	目	予算額	54年度決算額
会費		6,100,000	6,094,800
	〃 (講習所)	600,000	605,900
預金	利子	260,000	219,638
広告	掲載料	2,000,000	2,011,000
雑収	入計	80,000	79,550
収入	計	9,040,000	9,010,888
前年度	繰越金	5,506,000	5,090,479
合計		14,546,000	14,101,367

支出の部		(単位 円)	
科目	目	予算額	54年度決算額
名簿	編集費	45,000	45,300
	〃 印刷費	4,300,000	4,147,000
	〃 送費	850,000	695,640
会報	編集費	10,000	3,300
	〃 印刷費	650,000	628,100
	〃 送費	1,100,000	983,885
備品	費	35,000	244,630
通信	費	130,000	97,940
会合	費	150,000	122,132
総会	費	400,000	300,000
集金	費	140,000	131,170
総掛	費	430,000	426,710
旅費	費	600,000	619,560
懇話会	補助	200,000	150,000
支出	計	9,040,000	8,595,367
次年度	繰越金	5,506,000	5,506,000
合計		14,546,000	14,101,367

で、松田会長の挨拶に始まり、昭和五十四年度事業並びに決算報告及び昭和五十五年度事業計画並びに収支予算が審議され原案通り可決。続いて上之園副会長より教室の理況について報告があった後、懇親会に移った。今回の総会には地方からの参加者が非常に多く旧交を暖め名残りは尽きなかったが午後七時半過ぎ、洛友会万才を唱えて解散した。

関西支部総会

昭和五十五年度関西支部総会は、さる五月三十一日(土)本部総会と合同で、新都ホテルにおいて開催された。

今回は、近藤先生のお骨折りによって、特別行事として宇治にある京都大学ヘリオトロン核融合装置を見学させて頂いたあと、現在再開発工事がすすめられている母校へうかがい、学生時代の思い出を偲ぶことが出来た。

石油にかわるエネルギーの開発は、これからの日本の将来にかかわる最重要且つ緊急の課題といわれているが、ヘリオトロン核融合装置を見せて頂き、まさしくナノエナジープロジェクトにふさわしい雄大な研究であることを痛感させられた。参会者の方々も強い感銘を受けられた様子にうかがえた。総会は、新都ホテルの陽明殿で

行なわれたが、会長の松田先生をはじめ、大谷先生、近藤先生、上之園先生、池上先生、川端先生にもご出席頂き、総勢七〇名の参加があった。

議案は、恒例にしたがい、大森支部長のご挨拶のあと、前年度活動実績と会計報告、本年度の活動計画と予算の審議とつづき、そのあと懇親会に移った。

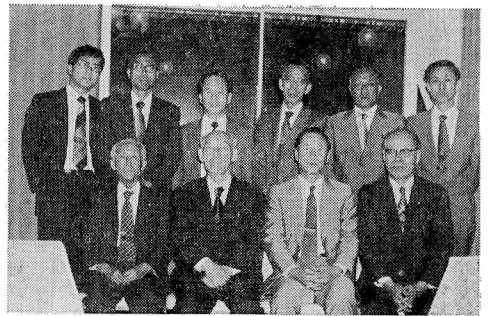
懇親会では、会場に「洛友会(同窓会)の歌」のメロディが流れる中、全員が入場され松田会長のご挨拶で始められた。立食パーティー約一時間半、各支部の代表者のテーブルスピーチ、松田先生の歌唱指導による「洛友会の歌」の合唱など、和気あいあいの中に旧交を温めることが出来た。(八田記)

洛友会東北支部 第15回総会報告

昭昭55年6月

第15回洛友会東北支部総会は、6月7日仙台市内の仙台共済会館において、10名の出席者をもって開催されました。

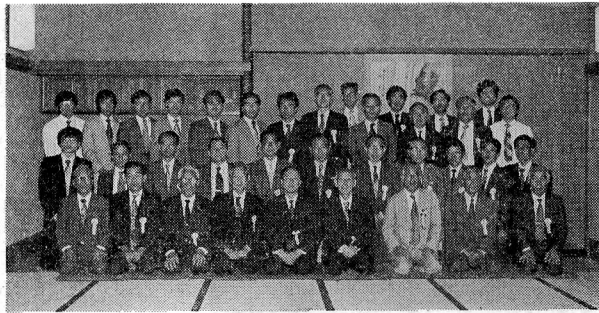
今総会には、本部より池上文夫先生に御出席いただいたうえに、洛友会会長でおられる松田長三郎先生に遠路京都より御出席いただきました。総会議事は滞りなくすすめら



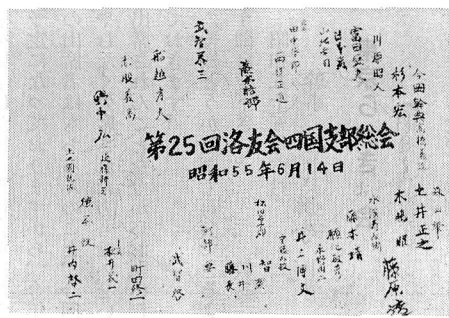
うかがい知った感じでした。会食とともに京都大学の近況、電気教室の改造の話、エネルギー、電気自動車の話、語学の勉強の話など色々な話題が、お元氣な松田先生を中心に弾みました。最後に、松田先生作詞、作曲の洛友会(同窓会)の歌(洛友会会報一〇八号)を、若々しい先生のお声による御指導のもとに皆で歌い、終りとなりました。

第25回 洛友会 四国支部総会報告

6月14日(土) 高松市内の旅館「紅羽」において、第25回洛友会



四国支部総会を開催した。本部からは松田会長、上之園教授、木嶋教授の御出席を頂き、支部からは33名集まった。総会は、はじめに松田先生、上之園先生の挨拶の後会務報告、予算案審議、役員改選などを行ない、最後に木嶋先生が撮られた京都大学のスライドを、昔日を懐かしみながら観賞し、無事終了した。



続いて、懇親会に入り、諸先生方の豊富な話題、支部会員の近況の情報交換等楽しいひとときを過した。

尚、当日の午前中、電気学会四国支部の主催により、木嶋先生に「電気工学と数理」という演題で講演をして頂いた。また翌日、松田先生は八十八カ所札所を参堂された。(昭和49年卒赤股記)

同窓会記事

昭和三十年

卒業生同窓会

さる五月十七、十八両日、昭和三十年卒業生の二十五周年同窓会を京都で開催した。

まず十七日には東山山麓、楠荘別館吉水庵にて懇親会を行ったが、前回以来五年ぶりとなつて、五時集合の案内に対して三時過ぎから三々五々集まり、定刻には出席予定者の全員がそろつた。

恩師の前田先生、林千博先生、大谷先生、近藤先生、池上淳一先生のご出席を待つて記念撮影の後開会、前田先生のご挨拶の後林先生ご発声で乾盃し宴にはいった。宴の後半には当日別の洛友会同窓会にお出になつていた松田先生も、本年米寿をお迎えになるとは思えないお元気なお姿でご出席頂いた。そして先生のご作詩作曲になる洛友会の歌を先生自らお教え頂いた。

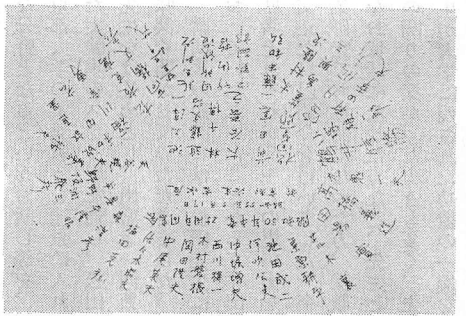
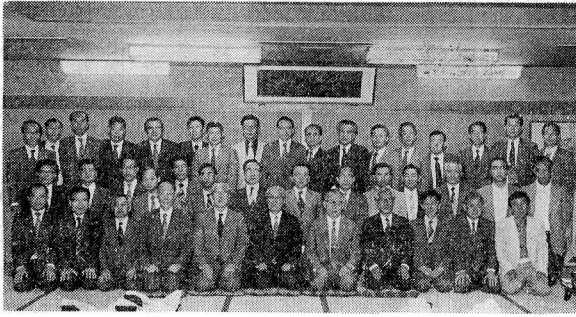
ふりかえつてみると十五周年の会は京都で開催同窓生の出席者は二十一名であつたが、二十周年の箱根には三十五名集まり、今回は更に三十七名(翌日参加者プラス一名)と前にも増して盛会となり、卒業後初めて顔を合はす面々もあつて久しぶりの懐かしさで時の

たつのも忘れる程であつた。

宴たけなわの折、トロント大学在職中の飯塚君から国際電話がはいり驚いたが、カナダからの手紙ならぬ電話での懇親会参加に一同大変感激した。

我々の年代はそろそろ各分野で部長、工場長、取締役等の重責を荷う者も多くなり、仕事の上で互にプラスになる情報交換や、トツプマネージメントの話題も多くなつたように感じられた。

翌日十二名は早朝から京都加茂西コースで一日ゴルフを楽しみ、又十五名は清水寺、その他の東山散策を楽しみ、午後解散した。次回三十周年は再び関東で開く



こととし、幹事は、電々の方に引受けてもらうことになつた。
(木村磐根記)

昭十会卒業45周年

記念同窓会報告

拜啓 緑蔭を吹きぬける風が肌
に快い季節となりました。

去る五月十七日の標記の同窓会は、松田、羽村、両先生をお迎えし、高木、荻野両君の御夫人を混えて、同窓二十六名が京都祇園八坂神社前の中村楼に集り開催しました。

先ず阿部先生と坂本君の御冥福を祈つてから、日高君の音頭で乾杯に始まり、それぞれメールの上つたところで殿井君のお世話による祇園舞妓の「京の四季」の踊を四季を通して観賞し、終り近く

には松田先生の作詩作曲による洛友会の歌を先生御自身の指導で講習して頂くなど、久しぶりに数時間を楽しく談笑し、盛会のうちに無事終了いたしました。

当日の寄せ書は別紙のとおりです。



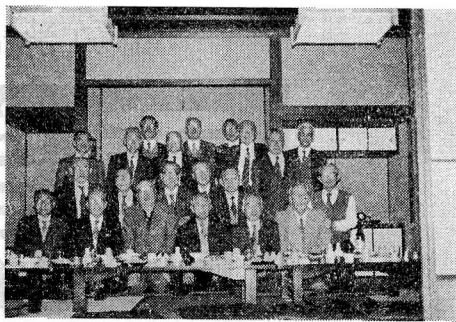
比お芳林 中堀孝志 香山日吉雄
小林大祐 和田孝一 中治保一
小田孝一 黒田治夫
坂本隆雄 神谷雄
昭十会卒業生同窓会
昭和五十五年五月十七日
中村楼 殿井を雄
林 幸
松田先生
高木先生
荻野先生
井上先生
塩澤先生
佐野先生
清水先生
天野先生
菅野先生

東京らっきよ会

(昭8~11年卒)

らっきよ会の2月例会(2月と8月の年2回、幹事持ち廻りで開催)が去る2月21日昭和9年組の当番幹事で三菱電機の高輪荘に於いて開催された。当日の出席者は後記の様に21名であつた。

常連の中に3~4名の体調を崩しての不参加者が出たのは残念であつたが、大いに歓を尽した後例によって祇園小歌なども出て盛会裡に散会した。



当日の出席者

昭和8年 蒲生朝郷、田井梁之、田中信高、西山安三

昭和9年 石川弘文、市村宗明、大塚順丈、河野勝也、重見通雄、中井寿徳、松井茂彦

昭和10年 有馬敏彦、井上友一郎

佐野一雄、高木正、高田昇平、佐々木卓夫、山上隆也

昭和11年 古池弘正、杉本省一、直海登良衛

(幹事・昭和9年市村)

東友会随想

昭和20年卒 泉 秀雄

私は東友会の例会の日を楽しみにして出来るだけ出席させて頂いて居ます。お互いに年を取るとだんだん恋しくなるものですが、それにも増して自分で会社をやつて居ると、色々の人とお会いすることが翌日よりの活力ともなりません。東友会は御承知の様に洛友会東京支部内のサブグループの一つで、昭和十七年卒業から昭和二十年卒業までの年度の方々の集りで、月例の昼食会と年に一度年末か年始の夕食の宴会とが行われています。

私は人の名前を覚えるのが下手でよく失礼をするものですから、そんなことの無い様にと第一回の例会の時、会が終わってから幹事さんに出席者名を尋ねて控えて帰えり、自宅に戻ってから名簿と首っ引きで出席者名の復習をしてみました。それがきっかけで第二回目的も同じ様にし、三回目も、四回目もと続いているうちに年度の違う方々でもお顔と名前が一致する様になり、やりだすと止めるのが惜しくなり、つい〜と続けて七年が経ちました。今では時々出席者の名前を尋ねられて私が答える時さえあり不思議に思います。

去る五月三十日の例会で七年目の年度末になりましたので、徒然なるまゝに集計して見ました所、案外面白い数字もありますので一部を御披露させて頂きます。東友会は昭和四十八年九月七日の第一回から昭和五十五年五月三十日までには四十六回開かれ、うち四十回が昼食会で六回が夕食の宴会でした。延べ出席人数は七十一人で一回の平均出席者数は十五人半です。そして一回の出席人数の最小は八人で最大は二十七人でした。

また出席者の側から見ますと四十六回中四十五回出席が一人と四十四回出席が一人ある反面、一回だけ出席の人は三人と割合少なく、最も面白いのは一人の出席回数を横軸に取り、延べ出席日数を縦軸に取った累積曲線を作りますと、丁度半分の二十三回の所で縦軸も半分の三五五を越して、大ざっぱに云うと中点に関して対称になることです。

また昨年アメリカへ転勤された方が、偶々日本に出張中に東友会があつて出席されるとか、或る年度では所属会員全員が一度は出席して居るとか、大変熱心な方々が多く、之等の方々に支えられて東友会が益々盛況になることを祈りたいと思います。

事務局よりの御願い

○会費納入の件
55年度会費未納の方は成るべく早い目に御送金下さる様御願ひします。
尚昨年度(54年度)以前の会費未納分は、御請求致しませんので、54年度分からの会費を御支払下さる様御願ひします。

○会員名簿の正確を期するため
勤務先別に、御手紙を差上げ御返事を頂いて居りますが、住所変更のある場合は、その都度会員各位から直接事務局宛御通知下さる様、お願い申し上げます。



計報

講大12年	松本	55・3・17
講大12年	林	55・4・22
講大9年	辻野	55・2・16
大5年	伊沢	55・5・4
大12年	幸前	55・4・14
昭和2年	和氣	54
昭和4年	竹上	55・4・17
昭和8年	奥	55・3・22
昭和14年	藤村	55・1
昭和14年	原田	54・8・19
昭和15年	松井	55・4・20
昭和23年	松井	55・4・20
昭和29年	折橋辰之祐	55・5・13
昭和17年	安倍	53・3・2

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

電気工学界の先端をゆく電気総合雑誌

月刊

電気評論

毎月
10日発売

東大金副誌

各界の権威を網羅した編集委員会責任編集の下、電力技術を中心にして広く電気技術全般にわたり平易に解説した技術革新時代にふさわしい月刊誌。毎月焦点をしばった新しい技術問題を捕えた特集記事のほか、論文・トピックの解説・講座・海外文献などを掲載しています。

8月号特集・需要家屋内配電

8月10日発売 定価 550円 送料 41円

- I 我が国の低圧需要家屋内配電方式と今後の動向について……………関西電力 山口真一郎
- II 低圧屋内配線の接地について……………千葉大学 川瀬 太郎
- III 最近のビル400V 屋内配電について……………東京電力 和田 敏
- IV 最近の屋内配電の省エネ設計について……………近畿電気工事 松岡 憲生
- V 屋内配線の定規調査の状況……………関西電気保安協会 松本 尚一
- VI 最近のビル特高受電設備について……………日新電機 岡 重一
- VII 200V 級直荷機器の開発とその適用について……………松下電工 加藤 隆三

我々に最も身近な家電機器，屋内配線は静かに革新期を迎えている。機器の200V～400V化がそれであり，各機器の大容量化，家庭の使用電力の増加・多様化に伴って必然のものである。昔から，電力系統におけるロス最大のものは低圧系統にあったが，現在では省エネの観点から重要なこのロスのみでなく，妥当な設備容量，ドロップの面からも捨て置けなくなっている。

低圧200～400V化の動きは既に30年代からあり，主として米国の動向に誘発されたものであったが，これは管理者がおり，一般人は手を触れることの少ないビルを主体としたものであった。しかし最近では温水器，クーラー電子レンジ，大型冷蔵庫などが普及し，一般家庭でも問題となり，これに供給する引き込み線には更に大きな問題となっている。

しかし家庭内の昇圧には切り換え・補償もさることながら，安全・保安問題が最大のポイントである。本号は世界的な動向を背景として電力会社・メーカーが考えている推進・対応策，最も重要な接地問題について考察する。

京都市左京区田中大堰町49

株式会社 電気評論社

電話京都 (075) 701-2582